

アウェイ・フロム・ハー 君を想う

2008(平成20)年4月30日鑑賞(東映試写室)

★★★



監督・脚本＝サラ・ポーリー／原作＝アリス・マンロー『クマが山を越えてきた』(短編集「イラクサ」新潮社刊)／出演＝ジュリー・クリスティ／ゴードン・ピンセント／オリンピア・デュカキス／マイケル・マーフィ／クリステン・トムソン／ウェンディ・クルーソン(ヘキサゴン・ピクチャーズ、アニー・プラネット配給／2006年カナダ映画／110分)

第2章

愛し方、愛され方はいろいろ

……アルツハイマー病をテーマとした日・韓・米の代表作に加えて、カナダ発の名作が登場！ そのヒロイン(?)は、アカデミー賞主演女優賞にノミネートされた1941年生まれ女優ジュリー・クリスティ。施設に入院した妻が夫を忘れ、施設内の車椅子の老人といい仲に……。そりゃ許しがたい暴挙。しかし……。？ 2組の夫婦の愛と心理を丹念に描写し、その心の中を映し出すのは、30歳前のカナダの女流監督サラ・ポーリー。デンマークの女流監督スサンネ・ビアだけではなく、世界にはあちこちにすごい才能があるものだと実感！

「アルツハイマー映画」日・韓・米代表作に、カナダ映画がプラス！

近時、アルツハイマー病をテーマとした映画は多い。その代表作は、①日本では、働きざかりの壮年男性を主人公とした『明日の記憶』(06年)(『シネマルーム10』172頁参照)、②韓国では、年若いお嬢さんを主人公とした『私の頭の中の消しゴム』(04年)(『シネマルーム9』137頁参照)、③そしてアメリカでは、初老の男性を主人公とした『きみに読む物語』(04年)(『シネマルーム7』112頁参照)……。？

そんな時代的な流れの中、カナダ映画でも、第80回アカデミー賞主演女優賞にノミネートされたジュリー・クリスティが主人公を演じたアルツハイマー映画が登場！

原作は？ 監督は？

原作はアリス・マンローの短編『クマが山を越えてきた』だが、それを自ら脚色し

監督したのは、何と1979年生まれというからまだ30歳前のカナダの女性監督サラ・ポーリー。『スイート ヒアアフター』(97年)や『死ぬまでにしたい10のこと』(03年)で女優としても活躍していたという彼女は、ネットで調べると、筋金入りの左翼活動家としても知られているとのこと。また、「反ハリウッド」の旗手としても知られているらしい。

そんな彼女が2年間女優活動を休業してまで監督業に専念したのが、長編初監督作品となるこの映画。30歳前の女優であり、2007年には映画誌『バラエティ』が選ぶ「作品を見るべき映画監督10人」に選ばれたという彼女が、この映画の監督・脚本を思いついたのは、アリス・マンローの原作本をカナダへの帰国途中の飛行機で、ヒロイン役と女優ジュリー・クリスティとを重ね合わせながら読んだためらしい。

2007年11月14日に観た『ある愛の風景』(04年)と『アフター・ウェディング』(06年)を監督・脚本したデンマークの女流監督スサンネ・ピアには感心したが、世界は広い。カナダにも、こんな若手のすごい女流監督がいたなんて……。

ジュリー・クリスティの美貌は、今なお健在！

あのオードリー・ヘプバーンが63歳で死んだのは1993年1月20日。そして、最近では、07年10月19日にはイギリスの大女優デボラ・カーが86歳で死に、08年1月19日には私の大好きだったスザンヌ・プレシュットが70歳で死んでいった。

日本では、去る4月29日に74歳の池内淳子が旭日小綬章を受章したが、私が青春時代に夢みた女優で、今なお現役で光り輝きながら第一線で活動している65歳超の女優は、1943年生まれのフランスの女優カトリーヌ・ドヌーヴと、1941年生まれの女優ジュリー・クリスティくらい……？

私がジュリー・クリスティを『ドクトル・ジバゴ』(65年)ではじめて観たのは高校1年生の時だが、あの当時、彼女は24歳。したがって、輝くようなオーラを放っていたのは当たり前。そんなジュリー・クリスティも今や既に67歳。アルツハイマーになってもおかしくない年齢だが、カトリーヌ・ドヌーヴとともにその美しさは今なお健在！

44年間の夫婦の重みは……？

この映画のヒロインは、自分でもアルツハイマー病を自覚し、自ら老人介護施設へ

の入所を決心したジュリー・クリスティ扮するフィオーナ。そんな彼女に今やさしい眼差しを注ぐのは、18歳の教え子だったフィオーナにちょっかいを出して(?)結婚した元大学教授のグラント(ゴードン・ピンセント)。もっとも、ストーリー展開の中で明らかになるのは、この2人の結婚はフィオーナからの積極的なアプローチによるものらしいから、その真相はあなた自身の目で……。

グラントとフィオーナ夫婦が、施設入所前に住んでいたのはカナダのオンタリオ湖沿いに建てられた家。年金問題の不祥事や75歳以上の後期高齢者(長寿)医療制度問題に沸きたつ今の日本とは異なり、グラントとフィオーナの老夫婦は、毎日美しい自然保護地区内を散歩し、クロスカントリー・スキーを楽しむのが常。また、2人仲良くキッチンに立ち、夕食を済ませた後はグラントがフィオーナに小説を朗読し、夜が更けていくという、経済的にも精神的にもリッチな生活。

そのうえ、日本では70歳を超えれば、100%近くがセックスレスで寝室も別というパターンだが、グラントとフィオーナの場合は夫婦生活もお継続中……?

フィオーナのハラの中は……?

若く美しい女子学生はフィオーナだけではなかったはずだから、若き日のグラントはきっと女グセの悪い問題教授……? そんなイメージは今全くなく、誠実にフィオーナに対して尽くしているグラントだが、さて、若い時は……?

夫の若い時の浮気について妻はいつまでも根にもつもの……? またそれは、たとえアルツハイマー病に罹患しても忘れられず、知らず知らずのうちに夫に対する復讐行為として顕在化するもの……?

2本続けて観た今回の試写室では、休憩時間中に女性の映画評論家たちの間でそんな議論が盛りあがっていたが、さて……? グラントとフィオーナとの44年間の夫婦の重みは当然だが、さてフィオーナのハラの中はどんなもの……? そしてまた、若き日の大学教授である夫が妻以外の女子学生に対して出していたチョッカイの数々に対する、妻の恨み、つらみの重みはどんなもの……?

若手女性監督らしい(?)、残酷な問いかけも……

『きみに読む物語』も、『明日の記憶』も、『私の頭の中の消しゴム』も、老壮青と世代こそ違うものの、自分の夫や妻であることすらわからなくなるという恐ろしいア



© 2006 The Film Farm/Foundry Films/pulling focus pictures Inc.

ルツハイマー病に夫婦の一方が罹患した場合の夫婦愛を涙ながらに描いた映画。しかし、サラ・ポーリー監督の『アウェイ・フロム・ハー 君を想う』はそれだけではなく、若手女性監督らしい、もっと残酷な問いかけも……？

それは、老人介護施設に入った妻フィオーナがアルツハイマー病によって夫グラントのことを忘れてしまうばかりか、そこに入所している車椅子の男性患者オーブリー（マイケル・マーフィ）と恋人のような仲になっているのを、グラントが施設を訪れるたびに目の当たりにしなければならないこと。毎日訪れてくるグラントに対してフィオーナは淑女らしくそれなりの対応は示すものの、それはあくまで他人行儀でよそよそしいもの。それに対し、車椅子のオーブリーに対するフィオーナの甲斐甲斐しい世話焼きぶりは、まるで最愛の夫に対するようなもの。

毎日毎日、老人介護施設を訪れるたびにそんな姿を見せつけられるグラントはそりゃたまったものではないが、これは果してフィオーナのアルツハイマー病がなせるワザ……？ それとも、若き日のグラントの浮気に対する恨み、つらみの反撃……？ また、そんな反応に苦悶しながらグラントが示す方向性は……？

もう1つの夫婦像は……？

グラントは20年前に大学教授を辞したらしいが、経済的には全然困っていない様子。これに対して、フィオーナが施設に入所してから急に彼女の恋人となった(?) 車椅子のオーブリーは、なぜか急に施設を退所することに……。

微妙な気持のまま、グラントがオーブリーの妻マリアン(オリンピア・デュカキス)の家を訪れ、いろいろと話を聞いたところ、その理由をはっきり経済的なもの。つまり、このままずっと施設でオーブリーの面倒をみてもらうと、今住んでいる家を手放さざるをえなくなるため、やむなくオーブリーを自宅に引きとったというわけだ。

もちろんグラントも「あんたの夫が施設の中で私の妻を誘惑したからけしからん！」と文句を言うつもりは全くなく、逆にフィオーナがオーブリーを失った寂しさに耐えているのなら、再度オーブリーを施設に入れてあげたいと思ったほど。そこで、グラントはある日勇気をもって、そんな提案をマリアンに対して申し出たが、現実はなかなかうまくマッチしないもの……？

アッと驚く展開が……

私がアッと驚いたのは、施設を訪れるたびにマリアンの家に寄り、マリアンに対してさまざまな心の悩みを打ち明けているうちに、マリアンがグラントに対して何らかの気持の変化をみせてきたこと。その結果、実現したあるパーティーへの出席(デート)とその帰りに実現した老人同士の「ベッドイン」の様子をみていると、私たち日本人にはとてもとてもと思える欧米人特有の動物的(性的)な元気のよさを実感……？ 70歳を過ぎて、なおかつこういうときめきを覚え、ベッドインできるというのは何ともすごいもの……。

私の同窓生たちは今年4月1日から順次60歳の還暦を迎えていくが、そんな同窓生の集まりで交わされる会話の多くは「もはや男ではない。もはや女ではない」といういかにも情けないもの。ところが、それに比べると、カナダのおじいさん、おばあさんたちの元気の良さにはホントにビックリ。やはりこれが、年間の半分以上をカナダやオーストラリアで過ごすという大橋巨泉流の、ホントの老後の豊かさというものかも……？



© 2006 The Film Farm/Foundry Films/pulling focus pictures Inc.

さて、どんな結末が……？

第三者としてはそんな無責任な評論をしていればいいのだが、当の本人たち4人はそれぞれ大変。こんなアツと驚く展開となった後、2つの夫婦はどんな方向に進んでいき、そしてどんな結末が待っているのだろうか……？ それはあなた自身の目でしっかりと……。

ちなみに、遺言は財産の承継問題のトラブルを防止するための大切な手段。そんな視点からこの映画を観ながら私が思ったのは、夫婦間において一方がアルツハイマー病に罹患した場合は、〇〇してくれということをあらかじめ書面に明記しておくことが、互いの理解を深めるために有益かもしれないということ。もっとも、そこまでの決心をそう簡単にできないのが通常の間人かもしれないが……？

2008(平成20)年5月1日記